

漢長安城未央宮の禁中——その領域的考察——

青 木 俊 介

はじめに

「中外相い応ずるに義理の文を以てす」(『漢書』卷三十四上嚴助伝)、「外内言を異にす」(『漢書』卷六十杜延年伝)と史料上見えるように、漢代の政治機構は前漢武帝期を起点として、皇帝とその側近官で構成される中朝(Ⅱ内朝)と、公卿中心の一般官僚によって構成される外朝とに二元化した。⁽¹⁾両者は宮中の禁門を境に空間を分かっており、禁門の内側、中朝側の空間を禁中と呼ぶ。

禁中は本来、皇帝の私的な生活空間であり、百官の長である丞相でさえ自由な進入を許されない特別な空間であった。この特別な空間に政治が持ち込まれたことにより、中外二元化後の漢帝国の政策は、皇帝と禁中への出入権を付与された中朝官とで計画立案され、外朝は中朝の決定に従って政策を施行するのみとなったのである。⁽²⁾

禁中という特殊空間を媒介とした皇帝と官僚との関係が、漢代の政治に影響を与えたことは言を待たない。然るに、中朝については

多くの研究蓄積⁽³⁾があるものの、中朝政治の舞台である禁中そのものについては、史料の制約・錯綜などのため、ほとんど触れられることはなかった。また、前漢の都城である長安城に関する研究も多岐にわたるが、その政治的中枢であった未央宮に対する歴史学からのアプローチは少なく、それに内在する禁中の研究も存在しない。よって禁中が、具体的にどこに存在したのかさえ判断していないのである。

そこで本稿は、前漢代政治の中心地であった長安城未央宮における禁中を対象として、その空間がどのような施設によって構成されていたのか、どのような存在形態をとっていたのか、そして未央宮のどこに位置していたのかを、文献史料や中国社会科学院考古研究所による発掘報告書を用いて検討・解明する。このようにして政治的空間領域を確定することは、中朝をはじめとする前漢代の政治・官僚制度を正確に捉えるための基礎となるだろう。

る。また、昭帝紀注の、「門閤には禁有り」という記述から、禁中とそれ以外の区画との間には、門戸（ここでは禁門を指す。あるいは省門・省闥・省戸とも）が存在し、外部からは嚴重に隔てられていたという。さらに氏は、

初め、破羌將軍（辛）武賢の軍中に在りし時、中郎將（趙）印と宴語し、印が道うに「車騎將軍張安世は始め嘗に上（宣帝）を不快ならしむ。上は之れを誅さんと欲するも、印家の將軍（趙充國）以為えらく『安世は本と榮を持ち筆を簪して、孝武帝に事えること数十年、忠謹なりと謂われたれば、宜しく之れを全度すべし』と。安世は是れを用て免るを得たり」と。充國の還りて兵事を言うに及び、武賢は罷めて故官に帰る。深く恨みて、上書し、印、省中の語を泄らすと告す。

『漢書』卷六十九趙充國伝

という史料をあげる。禁中に出入りしていた後將軍趙充國からの伝聞を、子の趙卬が漏洩したとして辛武賢が告発した事件である。禁中での出来事を外部に漏らすことは「漏泄省中語」とされる大罪であり、禁中の機密性の高さを証明する。

②特定の出入資格者の存在

禁中は外部から嚴重に隔離された空間であり、自由に出入することはできなかった。例えば、『史記』卷五十八梁孝王世家の褚少孫補筆の部分には、

諸侯王の天子に朝見するに、漢の法では凡^{およそ}当^た四たび見ゆるのみ。始め到れば、入りて小見す。……小見とは、禁門内に於いて燕

見し、省中に於いて飲するなり。士人の入り得る所に非ず。とあり、禁中は、天子の親族である諸侯王の朝見儀礼は行われても「士人」、すなわち一般官僚の立ち入りは許されなかったのである。

その一方で、前掲、昭帝紀注に見える「侍御する者」は禁中に入ることができた。米田氏の解釈によれば「侍御する者」、すなわち禁中への出入が許されていた者は以下のとおりである。

○侍中・中常侍

侍中・中常侍は禁中に入るを得。『漢書』卷十九上百官公卿表

○給事中

臣（谷）永は幸いにして給事中たるを得て、出入^{およそ}三年、干戈を執り辺垂を守ると雖も、思慕の心は常に省闥に存す。

『漢書』卷八十五谷永伝

○尚×

如淳曰く、「天子の物を主るを尚書と曰う。……『漢儀注』『省中には五尚有り』……」と。

『漢書』卷二惠帝紀注

『漢儀注』に曰く、「省中に五尚有り。即ち尚食・尚冠・尚衣・尚帳・尚席なり」と。或いは云えらく、「秦は六尚を置く。尚冠・尚衣・尚食・尚沐・尚席・尚書を謂う」と。

『通典』卷二十六職官典八・殿中監

○官婢・宦人

省中にて使令を待つ者は、皆な官婢なり。年八歳以上を挾びて、緑を衣せるを宦人と曰い、省門を出ずるを得ず。都監を置く。老いし者は婢と曰い、婢は宦人をして尚書に給使せしむ。

『漢旧儀』卷下

さらに、先行研究中朝官とされている散騎・將軍・諸曹・諸吏・大司馬も、禁中への出入資格を保持していた可能性が高いとする。

③ 皇帝とその家族との私的な生活空間

『漢書』卷七昭帝紀に、以下のような記述がある。

昭帝を立てて太子と為す。年八歳。……明日、武帝崩じ、戊辰太子、皇帝の位に即き、高廟に謁す。帝の姉の鄂邑公主は湯沐邑を益されて、長公主と為り、養を省中に共す。

昭帝が皇帝に即位したものの、八歳とまだ幼かったため、姉の鄂邑公主が禁中において昭帝を養育したという内容である。このように禁中は幼帝の養育の場という機能を有していた。また、

上（＝文帝）上林に幸するに、皇后・慎夫人従う。其の（＝皇后・慎夫人）禁中に在るや、常に坐を同じくす。

（『漢書』卷四十九爰盎伝）

屋漏の未だ尽きざること八刻、鷹監は茵次を以て婕妤以下を上せて後庭に至り、……刻尽きれば、簪珥を去り、蒙被して禁中に入れ、五刻にして罷む。即し留まれば、女御長入りて、扶けて以て出づ。

（『漢旧儀』卷下）

というように、皇帝が成人である場合には皇后や夫人とともに暮らし、妻妾との夜の営みがなされる場所であった。そして、『漢書』卷四十一樊噲伝では、

高帝嘗て病み、人に見ゆるを惡みて、禁中に臥して、戸者に詔して群臣の入るを得る無からしむ。……十余日にして、（樊）噲乃ち闔を排して直入し、大臣之れに随う。上、独り一定者に

枕して臥す。

というように、禁中において病臥の皇帝を宦官が介抱しており、前掲『通典』が引く『漢儀注』では、六尚（一説に五尚）の存在が確認できる。これらはいずれも禁中において皇帝の衣食住に奉仕する官職である。以上のことから米田氏は、禁中とは、皇帝と、皇后をはじめとする家族たちとの私的な生活空間であったと指摘する。

①から③の中で最も重要なのは、禁中は皇帝とその家族との私的な生活空間であったという指摘だろう。皇帝の私的な生活空間であったればこそ機密性が高く、人の出入が制限されたのである。このことは従来から漠然と認識されていたことではあるが、着実な史料分析によって論証したことは、非常に大きな意義を持つ。

さらに、禁中を「宮中の一区画」とする考えは注目に値する。「一区画」、つまりは施設の集合体という捉え方であり、禁中の存在形態を説明するうえで参考とすべき説である。しかし、米田氏の主たる目的は禁中の解明ではないため、その具体的な施設構成や、宮中における位置などには言及していない。

2. 井上氏の説

井上氏は当該論説の第一章を「未央宮の禁中について」とし、自説を開陳している。井上説を簡潔にまとめると以下のようになる。

『独断』巻上に、

（漢の天子の）居る所、禁中と曰い、後に省中と曰う。……禁中とは、門戸に禁有りて、侍御者に非ざれば入るを得ず。故に禁中と曰う。

とあることから、禁中は禁門によって隔てられた空間であって、その門の内側を禁中と呼ぶことがわかる。そして、『太平御覽』卷一百八十二・居十・門上の条には、

漢の制、内は禁省に至るを殿門と爲し、外は大道に出ずるを掖門と爲す。

とあり、内側に向かって「禁省（＝禁中）に至る」門を「殿門」としている。『独斷』では禁門より内側が禁中、つまりは禁中に至る門を禁門としているのであって、両者の記述を照らし合わせれば、殿門は禁門を指すと解することができる。よって、殿門すなわち禁門であり、殿中すなわち禁中である、ということになる。

井上氏は、その見解をさらに一歩進める。

劍を帯びて北司馬門・殿の東門（師古曰く、「北司馬門」に入り、又た殿の東門に入るなり」と。）に入り、前殿に上り、非常室中に入る。

（『漢書』卷二十七下五行志并注）

宣室・温室・清凉は、皆な未央宮殿の北に在り。宣明・広明は、皆な未央殿の東に在り。昆德・玉堂は、未央殿の西に在り。宣室は、未央前殿の正室なり。

（『三輔黄圖』卷三未央宮）

『漢書』および注によれば、「殿の東門に入る」、「前殿に上」とあるので、「殿」とは前殿をいうことがわかる。『三輔黄圖』では、

「未央宮殿」・「未央殿」に続いて「未央前殿」と出てくるので、「未央宮殿」・「未央殿」の「殿」が前殿であることがうかがえる。よって井上氏は、殿門の「殿」とは、具体的には天子が政務を聞く場所である「前殿」を指すもの、とする。殿門の、そして殿中の「殿」が前殿を指すのであれば、明言してはいないものの井上氏は、禁中

の具体的な領域を前殿と見なしているのだろう。

井上氏の論説は、未央宮の禁中の領域を具体的に比定したはば唯一のものだが、その説には史料上、多くの疑義・矛盾が存在する。

井上説の主たる根拠は『太平御覽』の記述であるが、『太平御覽』は宋代の編纂物であり、前漢代から隔たることおよそ一千年である。

ところで、井上氏はその論文の中で、『雍録』卷二・公車司馬門条、「司馬門より内、則ち禁中と爲す」という説を否定する。井上氏もあげている『三輔黄圖』や『漢書』の注を見れば、司馬門の内側全てを禁中とする『雍録』の誤りは明らかだが、著者程大昌は、なぜこのような間違いを犯したのか。それは、当時すでに漢代の宮殿制度が不明確であったからだろう。『雍録』が編纂されたのは宋代（ただし南宋）である。当然『太平御覽』についても同じことがいえよう。『太平御覽』の記事が誤っているとはいいい切れないが、前漢代の制度を宋代の史料のみに頼って解釈するのは極めて危険ではないか。

米田氏のいうように、禁中は本来、皇帝の私的な生活空間であり、一般官僚の進入は制限されていた。『史記』卷六秦始皇本紀には、

趙高、二世に説きて曰く、「先帝、天下を制するに臨むこと久し。故に群臣、敢えて非を爲し、邪説を進めず。今陛下、春秋

に富み、初めて即位すれば、公卿とともに廷に事を決すること奈何。事、即し誤り有れば、群臣に短を示すなり。天子は朕と称するも固より声を聞かず」と。是に於いて二世、常に禁中に居り、高とともに諸事を決す。其の後公卿、希に朝見するを得。

と、二世皇帝が公卿と政治決定を行う「廷」に出御せず、「禁中」に常居したため、公卿との謁見が稀になってしまったとある。公的な空間「廷」と、私的な空間「禁中」とが対比関係にあるというわけである。また、『漢書』卷九十九上王莽伝には、

庶民・諸生・郎吏以上の闕を守りて上書する者は日に千餘人。公卿・大夫は或いは廷中に詣り、或いは省戸の下に伏して、咸な言く、「……願くは公の女を天下の母に為すを得んことを」と。

とあるが、公卿・大夫の請願が省戸（＝禁門）の下であるのも、その中（＝禁中）に入ることができなかったためであろう。公卿が禁中へ立ち入れなかったのは、漢も秦と同様だったのである。

さて、井上氏が禁中として比定した前殿であるが、『漢書』卷八十二王商伝には、

天子（＝成帝）親ら前殿に御し、公卿を召して議す。

とある。皇帝が公卿とともに会議を行うという形態は、秦始皇本紀の「公卿とともに廷に事を決す」と同じである。ということは、前殿は公的な空間「廷」であり、私的な空間「禁中」とは相容れない関係にあるのである。よって、前殿と禁中とは区別されるべきものということになる。さらに『漢書』卷九十七下外戚伝では、

皇后を安漢公（＝王莽）の第に迎え、（馬）宮・（甄）豊・（劉）歆は皇后に璽綬を授け、車に登りて警蹕を称え、時を上林苑弄門に便し、未央宮前殿に入る。群臣、位に就きて礼を行い、天下に大赦す。

と、皇后冊立儀礼が前殿において行われている。このように前殿は、

国家の大典が挙行される場所であって、紛れもなく公的な空間である。また、前殿が禁中であつたなら、群臣が儀礼に参加することは可能であつたろうか。

禁中での出来事を外部に漏らすことは大罪であり、禁中が機密性の高い空間であつたことは米田氏の指摘のとおりであるが、前殿の正室とされる宣室について『漢書』卷二十三刑法志の注は、
宣室は政教を布くの室なり。

というように、政令・教令を宣布する場所としている。もし宣室、ひいては前殿が機密性の高い空間であつたならば、その機能を全く發揮しえなかったことになる。

以上から、前殿は公の場であり、私の場である禁中とは空間的性が異なることがわかる。

前殿と禁中とは、警備のうえにおいても区別が存在した。まず、警備を管轄する部署の違いがある。前殿をはじめとする諸殿の警備は、『漢書』卷十九上五官公卿表・郎中令条や『初学記』卷十二職官部下が引く『斉職儀』に、

郎中令は秦官。宮殿の掖門戸を掌る。……郎は門戸を守るを掌る。

『漢書』卷十九上五官公卿表・郎中令条
初め秦、郎中令を置く。宮殿の門戸を掌り、及び諸郎の殿中に在りて侍衛するを主る。

『初学記』卷十二職官部下引『斉職儀』
とあるように、郎中令（武帝期に光禄勳と改称）属下の郎官の職務であつたことがわかる。『漢書』卷六十五東方朔伝では、

（東方朔）中郎と為る。……上（＝武帝）竇太主の為に宣室に

置酒し、謁者をして董君（＝董偃）を引き内れしむ。是の時、朔は殿下に陸載す。

と、郎官の一種である中郎が前殿の宣室を警備している。

一方、禁中の警備についてであるが、『漢官旧儀』巻上に、殿外の門署は衛尉に属し、殿内の郎署は光禄勳に属し、黄門の鉤盾署は少府に属す。

という、宮殿の警備管轄区分に関する記述がある。「殿外の門署は衛尉に属す」とは、『漢書』卷九十九百官公卿表・衛尉条の、衛尉は、秦官。宮の門衛の屯兵を掌る。

という記事内容を考慮すると、殿外の宮門の警備は、衛尉の管轄下にあるという意味だろう。続く「殿内の郎署は光禄勳に属す」とは、前掲の『漢書』百官公卿表と『齊職儀』によれば、殿門・殿中の警備が光禄勳に属したという意味である。問題は「黄門の鉤盾署は少府に属す」という個所だが、記事中の「黄門」について、『統漢書』百官志三・少府条の注には、

禁門は黄闥を曰い、中人を以て之れを主らしむ。故に号して黄門令と曰う。

とあるので、黄門（闥）は「小門」の意）は禁門のことだと見なしうる。だとすると、『漢官旧儀』当該箇所の意味するところは、禁門、そしておそらくは禁中の警備が、少府属下の鉤盾署の管轄下にあったということになる。実際、『漢書』卷二十七下之上五行志では、

渭水虎上の少女陳持弓、年九歳。走りて横城門に入り、未央宮の尚方の掖門に入るも、殿門の門の戸を衛る者見る莫く、句盾

禁中に至り、覺られ得らる。

というように、禁中に侵入した少女が句盾（＝鉤盾）によって捕らえられているのである。このように、禁中の警備は少府属下の鉤盾署の管轄にあり、郎中令（＝光禄勳）属下の郎署の管轄にある前殿とは区別されるべきだろう。

管轄区分だけでなく、警備の厳重さにおいても前殿と禁中とでは度合いが異なっていた。

漢代、功臣に与えられた特権の一つに「劍履上殿」というものがあった。文字通り、劍を帯び、履物を履いたままでの昇殿が許される権利のことであるが、賜与されたのは而漢合わせてもわずか四人（前漢＝蕭何、後漢＝梁冀・董卓・曹操）しかおらず、最高級の特権であった。そのうちの一人である梁冀は、桓帝擁立の功によって元嘉元年に劍履上殿を許された¹³。ところが、『後漢書』伝二十六張陵列伝では、

元嘉中、歳首の朝賀に大將軍梁冀、劍を帯びて省に入らんとす。
（張）陵、呵叱して出さしめ、羽林・虎賁に勅して冀の劍を奪わしむ。

というように、梁冀が劍を帯びたまま省中（＝禁中）に入ろうとしたところ、劍を奪われ、その罪を問われている。劍履上殿の特権によって、劍を帯びたまま昇殿することは許されても、禁中に入ることはできなかったのである¹⁴。ということは、明らかに（前）殿と禁中とでは警備レベルが異なっていたのであり、両者は厳然と区別されていたことになる。

以上論証したように、前殿と禁中とは性格を異にし、また警備上

も区別される別個の空間である。よって、前殿を未央宮の禁中として比定する井上氏の説は成立しない。さらに前殿が禁中でないとなると、その殿門を禁門とすることもできなくなるのである。

前殿は禁中ではないので、その殿門は禁門ではない。しかしもし仮に、前殿以外の殿で禁中に指定されているものがあったとしたならば、その殿門は禁門であり、殿中は禁中となるのであって、井上説も生きてくる。そしてその場合に想定される禁中の存在形態は、禁中として指定された諸殿が未央宮中に散在する分散形態であって、これは米田氏の禁中を宮中の一区画、すなわち集合形態とする考えと対極に位置するものである。

果たして未央宮の禁中は、一体どのような存在形態をとっていたのか。また、禁中Ⅱ前殿説が否定された以上、禁中の具体的な領域はどのように比定されるべきなのだろうか。

二. 未央宮における禁中の構成

禁中は未央宮に属する空間であるので、領域を比定するにはまず、母集団となるべき未央宮全体の施設を把握しなければならない。諸史料において、未央宮中に所在したとされる施設の一覧が図表2である。史料検討により、これらの施設から禁中に該当するものを抽出する。微細な作業だが、禁中の構成要素を一つ一つ説明していくことで、おのずと禁中という空間の存在形態や、未央宮における位置といった全体像が明らかになるはずである。本来ならば図表2にあげた全ての施設に対する考察過程を公表しなければならぬが、紙幅の都合上、本稿では禁中に関係するものだけをあげるに止める。

1. 承明殿・金馬門・温室

宮廷内の政争は宮殿奥深くで繰り広げられ、関係記事は、その舞台の構造を知るのに有効な情報源となる。『漢書』卷六十八霍光伝に見える以下の場面もその一つである。

〔霍〕光、即ち群臣と俱に見えて太后に白すに、具さに昌邑王の以て宗廟を承くべからざるの状を陳ぶ。皇太后、乃ち車駕もて未央の承明殿に幸し、諸々の禁門に詔して昌邑の群臣を内る母からしむ。王、入りて太后に朝して還らんとし、輦に乗りて温室に帰らんと欲するも、中黄門の宦者、各々門扇を持ち、王の入るや、門を閉じれば、昌邑の群臣、入るを得ず。王曰く、「何をか為さん」と。大將軍（Ⅱ霍光、跪きて曰く、「皇太后の詔有れば、昌邑の群臣を内る母し」と。王曰く、「之れを徐せ。何ぞ乃の人を驚かすこと是くのごときや」と。〔霍〕光、尽く昌邑の群臣を驅出し、金馬門外に置かしむ。

昭帝が後継者を定めずに夭折したため、昌邑王劉賀が迎えられ即位した。しかし、そのあまりの不行状を見かね、時の最高実力者であった大將軍霍光は昌邑王の廃位を決行した。もちろん臣下の身で、大義名分もなく皇帝を玉座から引きずり下ろすことは不可能である。そこで、昭帝の後であった上官皇太后の協力をえることとなった。皇太后は未央宮承明殿で昌邑王の朝見を受けることになるのだが、これはある程度予見されていたことなのだろう。それに先立って、禁門を閉じ、王をその与党たる昌邑の群臣と隔離するよう命令しているのだから、承明殿は禁門の内側、禁中に属していたのである。

図表 2 未央宮施設一覧

施設名	附属施設	異称	典拠	備考
養徳宮		魚藻宮	長安志 3	三輔黄図 3 によれば未央宮外
猗蘭殿		崇芳閣	長安志 3	長安志 3 引洞冥記によれば景帝期に崇芳閣を改称
永延殿	三輔黄図 2、 長安志 3			
宴昵殿			長安志 3	
延年殿			三輔黄図 2 引三輔決録、太平寰宇記 25 引廟記、長安志 3	
回車殿			三輔黄図 2 引三輔決録、太平寰宇記 25 引廟記、長安志 3	四車殿に作る史料あり
含章殿		含章館	西京賦、水経注 19、長安志 3	
曲台殿		曲台	漢書 75・88 注、三輔黄図 2、長安志 3	
	曲台署		漢書 88	
玉堂殿		玉堂	漢書 75・75 注、西都賦、西京賦、三輔 黄図 2・3、水経注 19、長安志 3	
	大玉堂殿		漢書 87 下注引三輔黄図	
	小玉堂殿		漢書 87 下注引三輔黄図	
	玉堂署		漢書 75	
麒麟殿		麒麟閣、 麒麟館	漢書 75、西都賦、西京賦、太平寰宇記 25 引三秦記・関中記、三輔黄図 2 引 漢宮殿疏・2・3、水経注 19、長安志 3	麒麟閣は附属施設の可能性あり
金華殿			漢書 75・100 上注、西都賦、三輔黄図 2・3、長安志 3	
敬法殿			漢書 99 下、統漢書 10、長安志 3	
	敬法園		漢書 99 下、統漢書 10	
高明殿			長安志 3	
広明殿			三輔黄図 2・3、長安志 3	
高門殿		高門	漢書 72 注・75、三輔黄図 2 引三輔旧 事・3、長安志 3	
鉤弋殿			三輔黄図 2	
昆徳殿			西京賦、三輔黄図 2 引漢宮閣記・3	
承明殿			漢書 27 中之下・64 上・75・87 上注、 西都賦、三輔黄図 2・3、長安志 3	
	承明庭		西都賦	
	承明廡		漢書 64 上注、後漢書伝 30 上注、西都 賦、長安志 3	
神僊殿		神仙殿	西都賦、西京賦、長安志 3	
神明殿			三輔黄図 2 引漢武故事	史記 12 によれば建章宮に神 明台あり

清涼殿		延清室	西都賦、三輔黄図 2・3、長安志 3	
宣明殿			三輔黄図 2 引漢宮閣記・3	
宣德殿			三輔黄図 2、長安志 3	
前殿		王路殿、王路堂、未央宮大殿、未央宮殿、未央殿	史記 8・10、漢書 1 上・1 下・4・6・75・84・97 下・99 上、後漢書 伝 69 上、西京雜記上、三輔黄図 2・3、水経注 19、長安志 3	始建国元年に王路堂に改称
	後閣		漢書 99 下	
	東閣		漢書 99 下	
	上西堂		漢書 99 下	
	更衣中室		漢書 99 下	
	宣室	宣室殿、宣室閣	史記 84 集解・84 索隱、漢書 8・23 注・48 注・75、西都賦、西京賦、三輔黄図 2・3、水経注 19、長安志 3	宣室閣は附属施設の可能性あり
	非常室		漢書 27 下之上、統漢書志 17、太平寰宇記 25 引三秦記、三輔黄図 2 引漢宮殿疏・3、長安志 3	
	東廂	東箱	史記 106、漢書 49・65・93・99 上	
	西廂	西清、西箱	漢書 99 下	
	前殿署		漢書 27 下之上	
	殿中廬		漢書 97 上	
	未央廷	未央庭	漢書 82	
	朱鳥門	王路朱鳥門	漢書 99 中	
	白虎門		漢書 99 下、長安志 3	
長年殿			西都賦、西京賦、三輔黄図 2 引漢宮閣記、長安志 3	
通光殿			三輔黄図 2、長安志 3	
東明殿			三輔黄図 2、長安志 3	
万歳殿			三輔黄図 2、長安志 3	
白虎殿		中白虎殿、白虎閣	漢書 75・97 下・99 上、西都賦、類編長安志 3 引三秦記、三輔黄図 2・6 引廟記、水経注 19、長安志 3	白虎閣は附属施設の可能性あり
飛羽殿		飛雨殿	漢書 98 注、長安志 3	
武台殿		武台	漢書 54 注・75、三輔黄図 2・2 引三輔旧事、長安志 3	
平就殿			三輔黄図 2	
竜興殿		竜興館	西京賦、長安志 3	
寿安殿			三輔黄図 2、長安志 3	
寿成殿			三輔黄図 2、長安志 3	
掖庭殿		永巷、掖廷	漢書 99 下、西都賦、三輔黄図 3、長	史記 9 集解・索隱によれば永

	掖庭、掖庭宮、長巷	安志 3	巷を改称
雲光殿		西京雜記上、長安志 3	
九華殿		西京雜記上、長安志 3	
鳴鸞殿		西京雜記上、長安志 3	
開襟閣	開襟樓	西京雜記上、長安志 3	
月影台	月景台、月丹台	西京雜記上、長安志 3	
臨池觀		西京雜記上、長安志 3	
牛宮令舍		漢書 97 下	
掖庭獄	掖庭詔獄、掖庭秘獄	漢書 85	
暴室	暴室獄	漢書 8・97 下、三輔黃圖 3	
安处殿		西都賦、三輔黃圖 3、長安志 3	
鴛鴦殿	鴛鴦殿、鸕鶿殿	西都賦、西京賦、文選 22 李善注引閼中記、三輔黃圖 3、水經注 19、長安志 3	
蕙草殿		西都賦、三輔黃圖 3、長安志 3	
德殿		長安志 3	蕙草殿のことか
合歡殿		西都賦、西京賦、三輔黃圖 2 引三輔決錄・3、太平寰宇記 25 引廟記、長安志 3	
苕若殿		西都賦、三輔黃圖 3、長安志 3	
常寧殿		西都賦、三輔黃圖 3、長安志 3	
椒房殿		漢書 66・97 上、西都賦、三輔黃圖 2・3、長安志 3	
椒風殿	椒風舍	西都賦、三輔黃圖 3、長安志 3	
昭陽殿	昭陽舍	西都賦、西京賦、三輔黃圖 2 引廟記・3、水經注 19、長安志 3	
增成殿	增修殿、增城舍、增成舍	西都賦、西京賦、三輔黃圖 2 引廟記・3、長安志 3	
堯越殿		西都賦、三輔黃圖 3、長安志 3	
披香殿		西都賦、西京賦、三輔黃圖 3、長安志 3	
飛翔殿		西都賦、西京賦、三輔黃圖 3、長安志 3	
鳳凰殿	鳳皇殿	漢書 75、西京賦、玉海 159 引閼中記、三輔黃圖 2・3、水經注 19、長安志 3	
蘭林殿		西都賦、西京賦、三輔黃圖 3、長安志 3	
堯閣		三輔黃圖 6 引三秦記	
石渠閣		西都賦、西京賦、三輔黃圖 6 引三輔故事、水經注 19、長安志 3	
增盤閣	增槃閣	西都賦、三輔黃圖 2	後漢書集解は閣名ではないとする
屬車閣	車閣	三輔黃圖 6 引廟記	

天祿閣			後漢書伝 30 上注引三輔故事、西都賦、西京賦、太平寰宇記 25 引三秦記・関中記、三輔黄図 2 引漢宮殿疏、水経注 19、長安志 3	
飛閣			西都賦、後漢書伝 30 上注、三輔黄図 2	未央宮から他宮へつながる渡り廊下
朱鳥堂		朱鳥館、朱鳥殿、朱雀殿、朱雀堂	西京賦、長安志 3 引三秦記、三輔黄図 2 引漢宮殿疏、水経注 19、長安志 3	
昭寧堂			漢書 99 下	
朝堂			西都賦、西京賦	
果台			三輔黄図 5	
玉台			西京賦	
釣台			太平御覧 177 引三輔故事、三輔黄図 5	
釣弋台			長安志 3 引廟記	釣台あるいは釣弋殿の誤りか
通臺台			三輔黄図 5	史記 19 正義引括地志引雲陽宮記によれば甘泉宮に所在
東山台			三輔黄図 5、長安志 3・3 引三輔故事	
西山台			三輔黄図 5、長安志 3・3 引三輔故事	
柏梁台		栢梁台、栢梁殿、鳳閣	漢書 27 上、三輔黄図 5、長安志 3	水経注 19 によれば桂宮に所在
蘭台			西京賦、長安志 3	
甲觀		甲館	太平寰宇記 25 引三秦記、三輔黄図 2 引漢宮殿疏	漢書 10 如淳引三輔黄図によれば太子宮に所在
		画堂	三輔黄図 2 引漢宮殿疏	漢書 10 如淳引三輔黄図によれば太子宮に所在
温室		温調殿、温室殿、中温室殿	漢書 75、西京賦、西都賦、三輔黄図 2 引漢宮閣記・3、長安志 3	漢書 81 注によれば長樂宮にも同名の殿あり
画室			太平寰宇記 25 引三秦記、長安志 3	
織室			漢書 2・27 上、三輔黄図 2・3、長安志 3	
		東織室	三輔黄図 3	漢書 19 上によれば河平元年に廃止
		西織室	三輔黄図 3	漢書 19 上によれば河平元年に織室に改称
凌室			漢書 2・27 上、三輔黄図 2・3	
衛尉寺			漢書 19 上注引漢旧儀	
御史大夫寺			漢官旧儀上	
郎中府			史記 9・9 集解、漢書 3・3 注	
宦者署			漢官旧儀下、三輔黄図 3	
金馬署			西都賦、西京賦	史記 126 に「金馬門者、宦者署門也」とあるので宦者署のことか

	金馬門	金門、魯班門	史記 126、漢書 27 中之上・68、太平寰宇記 25 引三秦記・関中記、三輔黄図 2 引漢宮殿疏、三輔黄図 3、長安志 3	
鉤盾署		句盾、勾楯、鉤盾署	漢書 10、太平寰宇記 25 引三秦記・関中記、三輔黄図 2、長安志 3	
	僊人掌		漢書 99 下	史記 12 によれば建章宮にもあり
	土山		漢書 98・99 下	
	弄田		漢書 7 注臣瓚引西京故事、太平寰宇記 25 引三秦記・関中記、三輔黄図 2・3、長安志 3	
黄門署			漢書 68	
	黄門	黄闥	漢書 19 上注・99 下、後漢書 伝 68 注、続漢書 26 注	
内謁者署		内者署	三輔黄図 3	
郎署			漢書 99 下、漢官旧儀 上・下	漢書 49 注によれば上林苑にもあり
虎威			西京賦	
章溝			西京賦	
区廬			漢書 19 上注・67 注	
果馬廐			太平御覧 191 引三輔黄図	
騎馬廐			太平御覧 191 引三輔黄図	
金廐			太平御覧 191 引三輔黄図	
乾梁廐			太平御覧 191 引三輔黄図	
胡河廐			太平御覧 191 引三輔黄図	
大宛廐			太平御覧 191 引三輔黄図	
大廐			太平御覧 191 引三輔黄図	
駒駟廐			太平御覧 191 引三輔黄図	
輅輶廐		未央廐、路輶廐	漢書 27 中之上・100 上注、三輔黄図 3、太平御覧 191 引三輔黄図、長安志 3	
臧府			漢書 99 下	
太倉		大倉	史記 8、漢書 1 下、長安志 3	三輔黄図 6 によれば長安城外に所在
武庫			史記 8、漢書 1 下、三輔黄図 6、長安志 3	漢書 36 注、考古発掘によれば未央宮牆外に所在
若廬		若廬獄、若廬詔獄	漢書 82	
	蚕室		後漢書 伝 36 引漢旧儀注	
尚衣			漢書 2 注、通典 26 引漢旧儀、通典 26	
尚冠			漢書 2 注、通典 26 引漢旧儀、通典 26	
尚書			通典 26	
尚食			漢書 2 注、通典 26 引漢旧儀、通典 26	
尚席			漢書 2 注、通典 26 引漢旧儀、通典 26	
尚帳			漢書 2 注、通典 26 引漢旧儀、通典 26	

尚方		上方	漢書 10・27 下之上、漢金文録 4	
	中尚方		漢書 99 下	漢書新証百官公卿表第七上によれば武帝期に中・左・右に分化
	作室		三輔黄図 6	
尚沐			通典 26	
尚浴府			漢金文録 3	
滄池		蒼池、倉池	史記 125 正義引括地志引関中記、漢書 93 注、太平御覽 177 引三輔故事、三輔黄図 4、水経注 19、長安志 3	
	漸台		史記 125 正義引括地志引関中記、漢書 75・93 注・98、太平御覽 177 引三輔故事、三輔黄図 2・5、水経注 19、長安志 3	建章宮にも同名の台あり
毘圉			三輔黄図 6、長安志 3	
東永巷			漢 99 下	
作室門		尚方掖門	漢書 10	
止車門			史記 107、漢書 52、玉海 155 引関中記、水経注 19	下車の規定がある司馬門の異称か
司馬門		王路四門、王路門、宮司馬、宮殿司馬、司馬殿門	太平實字記 25 引三秦記・関中記、藝文類聚 62 引三輔旧事、三輔黄図 2、長安志 3	
	北司馬門		漢書 27 下之上	
	東司馬門		漢書 10・27 上、長安志 3	
	公車	公車司馬	史記 8 正義、漢書 1 下注	
	北関	玄武関	史記 8・8 正義、漢書 1 下・1 下注、太平實字記 25 引三秦記、太平實字記 25 引関中記、三輔黄図 2 引漢宮殿疏、西京雜記上、藝文類聚 62 引三輔旧事、水経注 19、長安志 3	
	東関	蒼竜関、青竜関	史記 8・8 正義、漢書 1 下・1 下注・4・5・26・27 上・63、太平實字記 25 引三秦記・関中記、三輔黄図 2 引漢宮殿疏、藝文類聚 62 引三輔旧事、水経注 19、長安志 3	
	栗罌	栗思	漢書 4・27 上	
閭闔門			玉海 155 引三秦記・関中記、水経注 19	三輔黄図 2 によれば建章宮の正門と同名
青瑣門			太平實字記 25 引三秦記・関中記、三輔黄図 2 引漢宮殿疏、長安志 3	
長秋門			漢書 63、長安志 3	
東交掖門			漢書 97 下	
北掖門			後漢書伝 62	
属車関			長安志 3 引廟記、類編長安志 3 引三秦記	三輔黄図 6 引廟記では属車関
白虎関			長安志 3 引廟記	三輔黄図 6 引廟記では白虎関

昌邑の群臣は金馬門外に駆逐されている。これは詔の指示に則った行動だが、この場合、詔中の「禁門」にあたるのが金馬門であることは明白なので、金馬門は諸禁門のうちの一つということになる。

結局のところ、昌邑王は温室において拘禁されたようであり、そしてこの時点で昌邑王に付き従っていた群臣は金馬門外に出され、王と隔離されている。ということとは、温室は金馬門内にあり、金馬門は禁門（の一つ）であるので、温室は禁中ということになる。さらに、この温室（あるいは温室殿とも）については、霍光伝前掲個所に後続する昌邑王の所業を述べるくだりに、

從官、更^{かゝるがわ}る節を持ち、（昌邑王は）昌邑の從官・駟宰・官奴二百余人を引き内れ、常に与に禁闥内に居りて敖戯す。……独り

夜、九賓を温室に設け、姉の夫昌邑の閹内侯に延見す。

とある。前半部分と後半部分はやや離れているが、昌邑王は常に禁闥（＝禁門）内、すなわち禁中で遊び戯れていたのだから、九賓を設けた温室も禁中に該当する可能性が高い。皇太后に朝見した後、温室に帰ろうとしたのもそのためだろう。また、『漢書』卷八十一孔光伝には、

沐日に帰休し、（孔光）兄弟妻子、燕語するも、終に朝省の政事に及ばず。或ひと光に問うて「温室省中は皆奈何の木を樹うるや」と。（孔）光、嘿^{もく}して応えず、更めて答えるに它語を以てす。其の泄らさざることはくのごとし。

とあるが、孔光が「温室省中」の木の種類を尋ねられた際、話をそらしたのも、温室が省中（＝禁中）に属するため、「漏泄省中語」の罪に問われるのを恐れたからだろう。

2. 石渠閣・天祿閣

石渠閣と天祿閣はともに中央政府の図書館・公文書館としての機能を有していた。⁽¹⁵⁾ このことは班固の「西都賦」に、

天祿・石渠有り、典籍の府なり。

と詠われているとおりである。宣帝期に石渠閣において経書の異同が論議された⁽¹⁶⁾のも、国家図書館としての機能ゆえであろう。

前漢末期、劉向・劉歆父子による大々的な校書作業が行われた。

『漢書』卷十成帝紀・河平三年の条には、その劉向の校書のことを記されている。

光祿大夫劉向、中秘書を校す。師古注…中と言いつて外と別つ。

顏師古のいうところは、『漢書』卷三十藝文志の注、

劉歆の『七略』に曰く、「外には則ち太常・太史・博士の蔵有り、内には則ち延閣・広内・秘室の府有り」と。

に見える内（＝中）・外の書庫のうち、劉向が校書を行ったのは、内（＝中）側に属する書庫だったということである。この内（＝中）・外の別とは、禁中・禁外の別であり、⁽¹⁷⁾劉向の校書作業の対象は、禁中の書籍であったということになる。

では、この校書作業は具体的にはどの蔵書を対象に行われたのか。それについては『三輔黄圖』卷六閣に、

劉向、成帝の末に天祿閣に校書し、專精覃思たり。

とあることから、天祿閣の蔵書であったことがわかる。また、『隋書』卷三十二經籍志の序言には、

（劉）向の卒して後、哀帝其の子歆をして父の業を嗣がしむ。

乃ち温室中に徙し天祿閣上に書せしむ。

というように、劉歆も父同様、天祿閣で校書作業を行ったとある。つまり、劉向・劉歆父子が校書した禁中の秘書とは、天祿閣所蔵の書籍だったのである。加えて劉歆の校書時には、禁中に属する温室も用いられたようであり、天祿閣が禁中に含まれる蓋然性は高い。

『後漢書』伝三十三班固列伝所載「西都賦」の注引く「三輔故事」には、

天祿・石渠は並びて閣名にして、未央宮の北に在り、閣を以て秘書す。

とあって、天祿閣と石渠閣とは秘書を所蔵する場所として、一括りに論じられている。天祿閣に所蔵されていた秘書は禁中の書であり、それと併記されている石渠閣の秘書も同様なのではないか。また、石渠閣の位置に関して『漢書』卷六十四上嚴助伝の注に、「承明廡は石渠閣外に在り」とある。承明廡は先に触れた承明殿の異称、あるいは附属施設であるとされている。それが「石渠閣外に在り」のだから、石渠閣は承明廡（あるいは承明殿）に近接していたことになる。また承明殿については、『三輔黄图』卷三未央宮には「著述の所」とあって、国家図書館および公文書館たる石渠閣との間に、強い結合関係を有していたことは想像に難くない。承明殿が禁中に属していたことはすでに論証した。それならば、その側に存在し、機能的な結合の強い石渠閣も、禁中に属したと考えられないだろうか。

3. 玉堂

玉堂（＝玉堂殿）は「璧幸の舍」とされ、大玉堂殿と小玉堂殿とがあったともいう。⁽²⁰⁾

『漢書』卷一十七中之上五行志に、次のような記述がある。

元帝の時、童謡に曰く、「井水溢れ、竈の煙を滅ばし、玉堂に灌ぎ、金門に流る。」……玉堂・金門は至尊の居なり。

ここで玉堂は、「至尊の居」、つまりは皇帝の生活空間とされている。皇帝の生活空間は禁中であるので、玉堂は禁中に属したのではなからうか。玉堂と併記されている「金門」は、『漢書』卷八十七下揚雄伝の注には、「金門は金馬門なり」とあり、金馬門のことである。そしてすでに述べたように、金馬門は禁門である。その揚雄伝の本文には、

（揚雄）金門を歴て玉堂に上ること日有るも、曾て一奇を画し、一策を出し、上、人主に説き、下、公卿に談ずる能わず。

とある。これについて程大昌の『雍録』は、当時、揚雄は承明に待詔していたため、宦者署から金馬門に入り、玉堂に上ったのだと解釈する。⁽²¹⁾ そうであれば、玉堂は禁門である金馬門内に所在し、そこは禁中ということになる。あるいは、この場合の「金門」は金馬門待詔を指し、揚雄が金馬門待詔として玉堂に給事していたことをいうのかも知れない。『漢書』卷七十五李尋伝には、

哀帝、初め即位するや、尋を召して黄門に待詔せしむ。……臣尋は位卑しく術浅く、過って衆賢に従って詔を待ち、太官に食み、御府に衣し、久しく玉堂の署を汗す。

と、黄門待詔の李尋が玉堂の署に給事しているが、この黄門も金馬

門と同じく禁門である。揚雄・李尋とも禁門に待詔しながら玉堂に給事していたのならば、玉堂が禁門の内側に位置した可能性は高い。

4. 宦者署・金馬署

金馬門は禁門の一つである。そして、その金馬門について『史記』卷一百一十六滑稽列伝以下のような記述がある。

金馬門は宦者署の門なり。門の傍らに銅馬有れば、故に之れを謂いて「金馬門」と曰う。

宦者署の門は金馬門であり、かつそれは禁門である。つまり宦者署は禁門の内側にあるのであって、そこは禁中とすることができ。

『後漢書』伝三十上班固列伝所載の「西都賦」およびその注には金馬署が見える。

承明・金馬、著作の庭有り。注…金馬は署名なり。門に銅馬有れば、故に金馬門と名づけ、待詔者は皆な之れに居る。

とあり、禁中の承明殿とともに「著作の庭」とされていて、関連性を感じる。また、滑稽列伝では宦者署の門とされている金馬門が、ここでは金馬署の門とされている。あるいは金馬署とは、金馬門を門とする宦者署の通称かもしれない。「待詔者は皆な之れに居る」というのは、『漢書』中に見える「待詔金馬門」のことであるが、「待詔宦者署」が存在することからも、金馬署＝宦者署と考えられる。

5. 鉤盾署・弄田・土山・僊人掌

鉤盾署は前述のように、禁中の警備を担当する官署である。『漢

書』五行志には未央宮に侵入した少女が、「鉤盾禁中に至りて覺られ得らわ」れたとあるので、鉤盾（＝鉤盾）署は禁中と見なせる。

鉤盾署の敷地内には、弄田・土山・僊人掌があった。そのことは『漢書』卷七昭帝紀・始元元年の条と、卷九十九下王莽伝に見える。

上（＝昭帝）、鉤盾の弄田に耕す。

〔漢書〕卷七昭帝紀・始元元年条

殿中鉤盾の土山・僊人掌の旁らに白頭公の青衣する有り。

〔漢書〕卷九十九下王莽伝

鉤盾署が禁中に所属するのだから、それに附属するこれらの施設も、当然禁中に属したことになる。また、弄田に対する注に、

時に帝は年九歳なれば、未だ親ら帝籍を耕すこと能わず。鉤盾は宦者の近署なれば、故に往きて試耕し戲弄を為すなり。

とあり、昭帝は幼かったため正式の籍田を行うことができず、近署である鉤盾でそのまねごとをしたのだという。一章の③であげた昭帝紀の記事によれば、当時昭帝は禁中において養育されていたので、

弄田、そして鉤盾署は禁中に属していたと考えられる。

6. 黄門・黄門署・臧府・尚方・作室

黄門が禁門であることは、前掲の『統漢書』百官志三・少府条の注にあるとおりである。門だけでなく、官署としての黄門、つまり黄門署も存在した。『漢書』卷十九上百官公卿表・少府条の中に、

少府……属官に……中書謁者・黄門・鉤盾・尚方・御府・永巷・内者・宦者八官令丞有り。

と、既出の鉤盾（署）・宦者（署）とともに見える。禁門である黄

図表 3 乗輿缶



門をその名に戴くのだから、それだけでも黄門署が禁中に属した確率は極めて高い。さらに次の史料から確証を得ることができる。

時に省中の黄金の万斤なるは一匱と為し、尚お六十匱有りて、黄門・鉤盾・臧府・中尚方、処処各々数匱有り。

〔漢書〕卷九十九下王莽伝
黄金六十匱が数匱ずつ、省中（＝禁中）各所に分散して所蔵されていたとあり、黄門を始め前述の鉤盾や臧府、中尚方などといった官署は、禁中に属したということになる。

このうち中尚方は、武帝期に中・左・右に分かれた三尚方のうちの一つで、〔漢書〕には、「尚方は禁器物を作るを主る」（卷十九上百官公卿表・少府条師古注）・「尚方は……御器物を作り供す」（卷六十七朱雲伝）とあり、皇帝が使用する器物を製作する官署であった。〔漢金文録〕卷四所載の乗輿缶には、

内者未央尚方乗輿金缶一容一石重一鈞九斤

元年十一月二日輪第初二百六十七

という銘文があって、この器物は尚方で作製されたものと考えられ

る。先に紹介した米田氏の説によれば、「尚×」の官は禁中への出入が許されていた。尚方は五尚や六尚には含まれていないものの、その名に「尚」の字を持っており、禁中との関係の深さがうかがわれる。

また『三輔黄图』卷六雜錄には、
作室は、上方の工作の所なり。

とあり、尚方の附属施設として作室を確認できる。

7. 若盧・蚕室

若盧は元々兵器を保管する場所であったが、牢獄としても使用された。その位置については、〔漢書〕卷八十二王商伝の注に次のようにある。

若盧は獄名、少府に属し、黄門内の寺、是れなり。

黄門は禁門であるので、その内側の寺（＝官署）とされている若盧は禁中と見なされていたということになる。

その若盧には、蚕室と呼ばれる附属施設が存在したことが〔後漢書〕伝三十六陳忠列伝引く〔漢旧儀〕の注によって知られる。

少府の若盧獄には蚕室有り。

禁中に属する若盧の附属施設なのだから、蚕室も禁中に属したとすることができよう。蚕室は、本来は養蚕のための施設であるが、宮刑を施す刑獄の場として使用された。⁽²⁷⁾

8. 五尚・六尚

米田氏が引用する『通典』卷二十六職官典八・殿中監が引く『漢

図表4 尚浴府行燭槃



儀注』では、尚食・尚冠・尚衣・尚帳・尚席の五尚が省中（＝禁中）にあったとされている。また、六尚のうちにあげられている尚沐・尚書もまた同様であったろう。

史書中に多数確認される尚書のほか、『漢書』卷四十周亜夫伝においては尚席を見つけることができる。

上（＝景帝）禁中に居り、亜夫を召して食を賜うに、独だ大蔵を置くのみにして、切肉無く、又た箸を置かず。亜夫の心は平らかならず、顧みて尚席に謂いて箸を取らしむ。

このように、尚席の官が禁中での宴席に奉仕している。さらに『漢金文録』卷三所載の尚浴府行燭槃の銘文、

温臥

内者未央尚浴府乘輿金行燭槃一容二升

重二斤十二両元年内者造第初八十四

の中には未央宮の「尚浴府」が見える。「沐浴」という言葉から、尚浴（府）は六尚の一つである尚沐と同類のものと考えられよう。

「温臥」は温室のことともいわれる。もしそうなら温室は禁中に属するので、尚浴と禁中には深い関係があったことになる。

9. 後宮諸施設

後宮が皇后・妃妾をはじめ、宮女たちの生活空間であったことは周知のとおりである。皇帝の生活空間は禁中であるが、後宮は禁中といかなる関係にあったのか。

『漢書』卷八十五谷永伝に、以下のような上奏文がある。

中黄門・後庭の素より驕慢にして謹しまず、嘗て酒に酔うを以て臣の礼を失いし者は悉く出し留むる勿かれ。三綱の蔽に勤め、後宮の政を修めよ。

後宮の綱紀肅正に関する内容であるが、その具体的な方法として、驕慢な「中黄門」の追放を進言している。この「中黄門」だが、『漢書』卷十九上・百官公卿表・少府条の注に、

中黄門は奄人の禁中に居り、黄門の内に在りて給事する者なりとあり、禁中に給事する奄人（＝宦官）であることがわかる。禁中に給事する中黄門を追い出すことで後宮の刷新を図ろうとしたのだから、後宮は禁中に含まれていたことになる。

後宮は複数の建築物によって構成されていたが、その主体となっていたのは皇后の住居である椒房殿と、その他の后妃たちが住まう

掖庭殿であった。

後宮には則ち掖庭・椒房有り、后妃の室なり。(班固「西都賦」)
椒房殿は皇后の居る所なり。(『漢書』卷六十八霍光伝注)

婕妤以下、皆な掖庭に居る。

『文選』卷一班固「西都賦」李善注引「漢官儀」
掖庭殿は婕妤以下、多くの后妃たちの住まいであった。そのため
か、史料中には複数の附属施設を確認できる。『西京雜記』巻上には、

漢の掖庭には月影台・雲光殿・九華殿・鳴鸞殿・開襟閣・臨池
觀有り。

とあって、殿閣などいくつもの大型建築物が附属していたことがわかる。同じく『西京雜記』巻上には開襟閣と同一の建物と思しき「開襟樓」が見えるが、ここは女官たちが裁縫を習う場所であった。⁽²⁹⁾
成帝には子が無かったため、傍系の定陶王が太子に立てられ、成帝の死後、即位した。これが哀帝である。ところが即位後になって成帝に実子があったことが判明した。

元延元年中、(曹)宮、(道)房に語りて曰く、「陛下(Ⅱ成帝)宮を幸す」と。後数月、(曹)暎、殿中に入り、宮の腹の大きなを見、宮に問う。宮曰く、「御幸有りて身ごもれり」と。其の十月中、宮、掖庭の牛官令舎に乳し、婢、六人有り。

『漢書』卷九十七下外戚伝
記述によれば、成帝の御落胤は掖庭殿内の牛官令舎において育てられたという。牛官については史料に乏しく、詳細は不明だが、掖庭殿の家畜を管理する官署であろうか。

宮女が罪を犯した際に収監される牢獄は掖庭殿内にあった。『史記』卷四十九外戚世家では、鉤弋夫人が武帝の命によって掖庭の獄に送られている。

帝(Ⅱ武帝)鉤弋夫人を譴責す。夫人、簪珥を脱ぎて叩頭す。
帝曰く、「引きて持ち去り、掖庭の獄に送れ」と。

また、掖庭殿には暴室という施設があった。『漢書』卷八宣帝紀の注によると、

応劭曰く、「暴室は、宮人の獄なり。今日の薄室なり……」と。
師古曰く、「暴室とは、掖庭の織作染練を主するの署なり。故に之れを暴室と謂う。暴曬を取りて名と為すのみ。……蓋し暴室の職務は既に多ければ、因りて置獄を為し其の罪人を治するを主する。故に往往にして暴室獄と云うのみ。然れども本と獄名に非ず。応説之れを失するなり……」と。

というように、本来の暴室は掖庭殿内の染織を掌る官署であったが、宮人の獄としても機能していた。実際、成帝の隠し子やその関係者は暴室獄に収監されていた。⁽³⁰⁾

後宮の宮女は武帝の時には数千人に達したという。⁽³¹⁾ おそらくはそのためであろう、「三輔黄圖」卷三未央宮には、椒房・掖庭両殿に加え、さらに十四殿が増築されたとある。

武帝の時、後宮八区、昭陽・飛翔・増成・合歡・蘭林・披香・鳳皇・鸞鸞等の殿有り。後に又た安処・常寧・茝若・椒風・堯越・蕙草等の殿を増修し、十四位と為す。

このうち、昭陽殿(Ⅱ昭陽舎)には成帝の寵姫である趙婕妤、増成殿(Ⅱ増成舎)には班婕妤、椒風殿(Ⅱ椒風舎)には哀帝の寵臣で

ある董賢の妹董昭儀がいたとされ、⁽³²⁾これらは皇帝の妃妾たちの住居であった。

以上、主に文献史料を分析することで、未央宮諸施設の中から禁中に属するものを論証・抽出した。それらを以下に列挙しておく。

承明殿・承明廬・金馬門・温室・石渠閣・天祿閣・玉堂・宦者署（＝金馬署）・鉤盾署・弄田・土山・僊人掌・黃門・黃門署・臧府・尚方・尚食・尚冠・尚衣・尚帳・尚席・尚沐・尚書・尚浴府・椒房殿・掖庭殿・月影台・雲光殿・九華殿・鳴鸞殿・開襟閣（＝開襟樓）・臨池觀・牛官令舍・暴室・掖庭獄・昭陽殿・飛翔殿・増成殿・合歡殿・蘭林殿・披香殿・鳳皇殿・鸞鸞殿・安処殿・常寧殿・茝若殿・椒風殿・登越殿・蕙草殿

それでは、これら禁中の諸施設は未央宮内のどこに、そしてどのように存在したのだろうか。次章において禁中の位置および存在形態を明らかにしてみたい。

三、未央宮における禁中の位置と存在形態

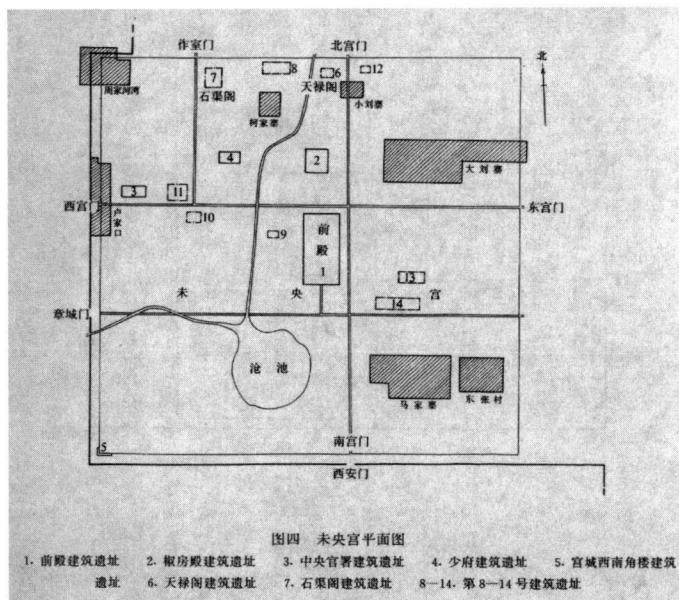
本章では前章において明らかにした禁中諸施設を、今度はその位置の解明に焦点をしばって考察を進める。しかし、未央宮内の施設の配置状況を伝える史料はそれほど多くない。そこで、これまで主として用いてきた伝世文献史料に加え、考古調査の成果を活用することで禁中諸施設の位置を確認していく。それらの位置関係が判明すれば、おのずと禁中の存在形態、すなわち集合型か分散型かを判別することができるだろう。また、それらの考察による知識をえた

うえで再び文献史料を検討すれば、新たな事実も見つかるはずである。

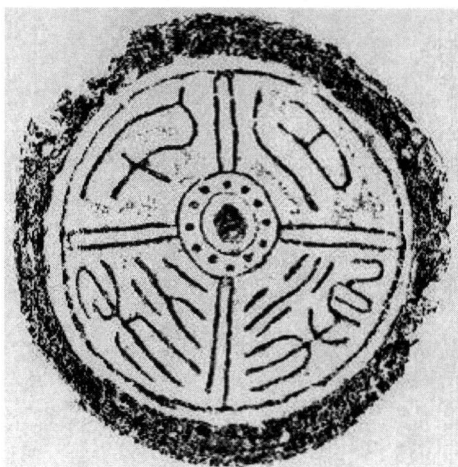
1. 天祿閣・石渠閣・承明殿の位置

前章②であげた『後漢書』伝三十上班固列伝所載「西都賦」の注

図表5 未央宮平面図



図表 6 「石渠千秋」瓦当



が引く『三輔故事』には、天祿閣と石渠閣はともに未央宮の北に位置していたとある。史料中には、更に具体的な位置に関する記述もあって、

天祿閣は大殿の北に在り、閣を以て秘書す。

『文選』卷一班固「西都賦」李善注引『三輔故事』
石渠閣は未央大殿の北に在り、以て秘書を蔵す。

『漢書』卷三十六劉向伝注引『三輔旧事』
というように、「大殿」・「未央大殿」こと未央宮前殿の北に所在していたことがわかる。

未央宮遺跡には、天祿閣・石渠閣の跡と伝えられる高台が存在する。これらはそれぞれ前殿遺跡の北と西北に位置している。かつて

天祿閣遺跡からは「天祿閣」の文字瓦当と、天鹿文様の瓦当が出土した。「天鹿」は「天祿」の仮借である。石渠閣遺跡からは、「石渠千秋」の文字瓦当が出土⁽³³⁾しており、伝承の正しさを示している。

石渠閣が前殿の北にあるならば、石渠閣の近傍に所在したとされている承明廬および（承明殿）も前殿北側に位置したことになる。『考古報告』によれば、石渠閣遺跡の西、天祿閣遺跡と挟まれた場所に建築遺跡（第八号建築遺跡）が発見されており、一八頁ではこれを承明殿の遺跡としている。「典籍の府」である天祿・石渠両閣と、「著述の所」である承明殿の機能的関係を考慮すると、妥当な位置であろう。

2. 温室の位置

張衡の「西京賦」には、温室の位置について次のようにある。

温調は（未央宮前殿の）北に延ぶ。

楊寛氏によれば、「温調」とは『三輔黄图』にいうところの温室のことであり、温室は前殿の北にあったということになる⁽³⁴⁾。

その『三輔黄图』（卷三未央宮）には、

宣室・温室・清凉、皆な未央宮殿の北に在り。

とある。一見すると、温室が未央宮前殿以北に所在したことを記すかのようであるが、前殿の正室である宣室と併記されているため、「未央宮殿の北に在り」とは、前殿敷地内における北部という意味であり、温室を前殿の附属施設と見る説も存在する。⁽³⁵⁾『漢書』卷七十五京房伝には、元帝が温室において公卿・朝臣に会議させた⁽³⁶⁾記事もあり、温室が皇帝の私的な空間である禁中ではなく、公的な空間

である前殿に属すかのような印象を受ける。

ただ温室については、史料間の矛盾が多い。例えば、『漢書』卷八十一孔光伝の注が引用する晋灼の説によれば、「長樂宮中、温室殿有り」とあり、『歴代宅京記』卷四関中二が引く『漢宮閣記』には、「未央宮の東闕に在り」とある。さらに、『漢書』卷七十五翼奉伝によれば、すでに文帝期には温室が存在したとのことだが、『三輔黄图』卷三未央宮・温室殿の条には武帝が建てたとあって、建設年代も食い違っている。これらのことを総合して鑑みるに、温室という施設は複数存在したのではあるまいか。『文選』卷一班固「西都賦」李善注が引用する『三輔黄图』によれば、

未央宮には清涼殿・宣室殿・中温室殿・金華殿・大玉堂殿・中白虎殿・麒麟殿有り。

とのことだが、この中の「中温室殿」とは、二章の②で取り上げた「中秘書」の語法と同様で、禁中の温室を特に指したのではないだろうか。先にあげた『漢書』孔光伝に見える「温室省中」という表現も、これと同類だろう。「中」と呼んで区別するのは、「外」にも存在したからに違いない。温室は長樂宮や、未央宮前殿などの禁外、そして禁中というように各所に存在し、そのために史料上混乱が見られるのではないか。

3. 承明殿・後宮および作室門・作室・敬法闔・敬法殿の位置

王莽は皇帝の位を前漢王朝から篡奪し、新王朝を開くが、度重なる失政のために各地で反乱が発生、最後には更始帝の漢軍によって未央宮の漸台で殺害された。漢軍が長安城内に侵入し、王莽が未央

宮内を逃げ回る姿が『漢書』卷九十九下王莽伝に描かれている。

十月戊申朔、(漢)兵、宣平城門より入り、……二日己酉、城中の少年朱弟・張魚等園掠せらるるを恐れ、趨謹並和して、作室門を焼き、敬法闔(注…師古曰く、「敬法は殿名なり。闔は小門なり」)に斧し、諱して曰く、「反虜王莽、何ぞ出でて降らざるや」と。火、掖廷・承明に及ぶ。黄皇室主(＝平帝王皇后)の居る所なり。(王)莽、火を宣室前殿に避くるも、火、輒ち之れに随う。三日庚戌、晨旦明、群臣、莽を扶掖し、前殿より椒除を南下し、西のかた白虎門を出するに、和新公王揖、車を奉じて門外に待つ。莽、車に就き、漸台に之き、池水を阻まんを欲す。

宣平門は長安城東牆最北の門(図表1参照)なので、漢兵は北方から未央宮に向かって来ることになる。それに呼応した朱弟・張魚らが焼いた作室門は『考古報告』によれば、未央宮の北西部に位置した。⁽³⁹⁾その作室門の火が掖廷(＝掖庭・承明におよんだのをうけて王莽は、前殿の宣室、そして滄池内の漸台へという逃走経路をたどるが、これは漸次北から南へと移動しており、起点の掖庭殿と承明殿が未央宮の北部に位置していたことがわかる。

また、敬法殿の門である敬法闔に斧し、焼かれた作室門の火が掖庭殿・承明殿におよんだのだから、作室門・敬法殿・掖庭殿・承明殿はさほど隔たっていないかたはずであり、さらに、承明殿の側に位置していた石渠閣も、これらの施設に接近していたことになる。⁽⁴⁰⁾

作室門は『漢書』卷十成帝紀の、

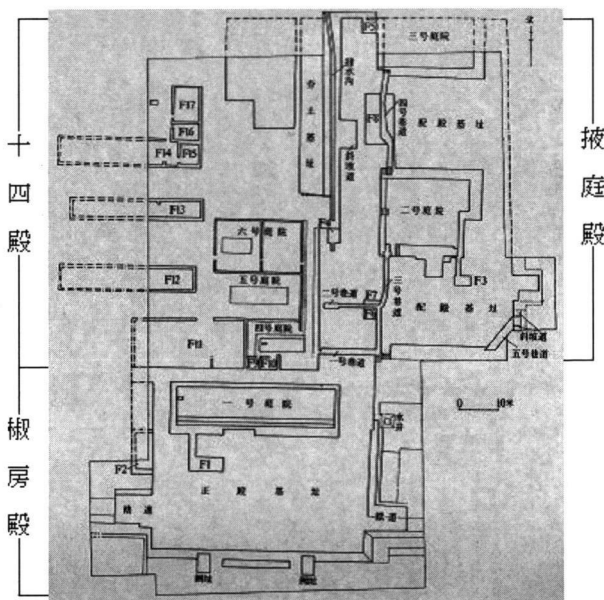
元帝即位するや、帝(＝成帝)太子と為る。……初め桂宮に居

る。上嘗て急ぎ召すや、太子章樓門を出ずるも、敢えて馳道を絶らず、西のかた直城門に至り、絶るを得て乃ち度る、還りて作室門に入る。

という記事から、つとに桂宮と相い対して位置すると考えられてきた。桂宮は未央宮の北にあり(図表1参照)、それと向かい合った未央宮の北牆において門跡が発見されている。作室門は名を作室に因み、未央宮の掖門(「脇門」)の一つとされる。第二章⑥の『三輔黄図』の記事によれば、作室は尚方の附属施設であるので、一章にあげた『漢書』五行志に見える「尚方の掖門」は作室門の異称である。作室門周辺では工官関係の遺跡・遺物が集中して出土しており、「禁器物を作るを主る」(『漢書』卷十九上百官公卿表・少府条師古注) 尚方、および作室は未央宮西北部に位置していたのだらう。

考古発掘によって、皇后の居所である椒房殿の遺跡が未央宮前殿北側に発見されている。遺跡は全て発掘されたわけではないが、全体的に逆し字型をしており、接続する南北二つの大型遺構を主体として構成されている。『発掘報告』は南の遺構を椒房殿の正殿、北の遺構を配殿としているが、楊鴻勛氏は「正殿」こそが椒房殿であり、「配殿」は掖庭殿の遺構であるとする。逆し字の空白部分には、比較的小規模な建築遺構が複数確認されている。『発掘報告』では「附属房屋」としかしていないが、楊氏はこれらを増築された昭陽以下の十四殿と考え、「椒房殿遺跡」全体をもって後宮遺跡と見なしている。王莽伝の記述から掖庭殿が未央宮の北部に位置していたことがわかるが、考古調査結果と照らし合わせれば、椒房殿・十四殿も含む後宮全体が未央宮北部に存在していたことがわかる。

図表7 椒房殿遺跡平面図



以上、文献史料と考古資料の考察・照合の結果、前章において禁中に属すとされた施設の多くが、未央宮北部、特に前殿以北に位置していたことが明らかとなった。このような施設の集中状況を考慮すると、その存在形態は集合型であって、未央宮の禁中とは、前殿以北に位置する宮中の特定区画を指すものとすることができる。となると、文献史料上では確認できなかったが、当該区画に所在する敬法園と敬法殿も禁中に含まれていたことになる。

皇帝の生活空間という禁中の基本概念に立ち返って考えてみれば、石渠閣・天祿閣などの図書館や、宦者署・鉤盾署などの官署、尚方などの工房といった施設は、単体ではそれに当てはまらない。これらは禁中という生活区画内の一施設という条件の下で、はじめて生活空間として認識されうるのである。

おわりに

これまでの考察によって、漢長安城未央宮の禁中とは、前殿以北に位置する特定の区画であることがわかった。前殿遺跡は、未央宮遺跡全体のほぼ中央に位置している。名称は「前」殿でありながら未央宮南部（天子南面なので前＝南）になく、中央にいながらにしてその名を負ったのは、その北（＝後）に位置する至尊の居、禁中を基点としていたことによる。未央宮に見られるこのような宮殿配置は、朝廷である正殿を前にし、居住区である寢宮を後にする、いわゆる「前朝後寝」の理想に則った形式といえる。

禁中の領域が明らかになったことで、漢代の政治・官僚制度をより正確に捉えることができるだろう。例えば、米田健志氏はその論文の注において、中朝の萌芽とされる武帝の側近集団に対し、「（武帝の側近である）侍中・殿助・朱買臣らが活動した場所は、禁中ではなく公卿の集議においてであり、禁中における皇帝の官房としての中朝の機能は、この時期には未だ現れていないと考えられる」という見解を下している。⁽⁵⁰⁾しかし本稿の考察によれば、殿助・朱買臣等の詰め所であった承明廬は禁中に存在していた。確かに『漢書』などでは、集議において公卿を論破する側近たちの姿が描かれている

が、彼らは武帝の意思の代辯者であり、公卿との集議に臨むに当たっては、事前に武帝との協議が行われていたはずである。⁽⁵¹⁾そしてその場所は、承明廬が所在し、公卿の立ち入りが許されない禁中であつたに違いない。この当時において、皇帝の官房としての中朝の機能がすでに出現し始めていたといえないだろうか。

武帝期に見られる政治形態の劇的な変化——中朝の出現——は、本来は皇帝の生活空間であった禁中に政治が持ち込まれ、その空間の特異な閉鎖性に立脚して成立したものである。このように、空間の構造・性格、その利用法の変化が政治・官僚制度に与えた影響は多大である。活発な考古発掘によって、中国古代官衙の実態が明らかになりつつある昨今、空間からのアプローチはより重要になってくるだろう。本稿はそのための予備的考察である。

注

(1) 勞幹「論漢代的内朝与外朝」『中央研究院歷史語言研究所集刊』第一本、上海、一九四八年。後、同氏著『勞幹學術論文集』甲編上冊、藝文印書館、台北、一九七六年所収。

(2) 西嶋定生「武帝の死——塩鉄論」の政治的背景——『古代史講座』第一巻、学生社、一九六五年、一六三頁。後、同氏著『中国古代国家と東アジア世界』、東京大学出版会、一九八三年所収、一九七—一九八頁。

(3) 注1の論稿のほか、富田健之「内朝と外朝——漢朝政治構造の基礎的考察——」『新潟大学教育学部紀要（人文・社会科学編）』第二十七卷第二号、一九八六年）には、中（＝内）朝・外朝問題に関する諸説がまとめられている。

(4) 鶴間和幸「秦漢比較都城論——咸陽・長安城の建設プランの継承——」

『茨城大学教育学部紀要』第三号、一九九一年に国内外の研究がまとめられている。

(5) 『漢長安城未央宮—1980—1989年考古発掘報告』(中国大百科全書出版社、北京、一九九六年)。以下、『発掘報告』と称す。

(6) 『佛教大学大学院研究紀要』第五号、一九七七年。

(7) 『東洋史研究』第六四卷第二号、二〇〇五年。

(8) 例えば注1論稿において勞幹氏は、侍中が禁中に出入したことを指摘したうえで、「(侍中)は天子の平時の生活中、宴遊・後宮を除き、常に左右にあり、一切の諸事を取り仕切った。」と述べており、つとに禁中が皇帝の生活空間と認識されていたことがわかる。

(9) 本稿で使用する何清谷著『三輔黄图校釈』(中華書局、北京、二〇〇五年)では巻三だが、井上氏の使用する張聞声校『校正三輔黄图六卷』では巻二である。

(10) 佐竹昭「古代宮室における『朝廷』の系譜」『日本歴史』第五四七号、一九九三年。後、同氏著『古代王権と恩赦』雄山閣、一九九八年所収、四六六頁。

(11) 雷從雲・陳紹棟・林秀貞著『中国宮殿史』(文津出版社、台北、一九九五年、八六頁)。

(12) 宣室、未央前正室也『漢書』卷二十三賈誼伝。

(13) 元嘉元年、帝(Ⅱ桓帝)以冀有援立之功、欲崇殊典、乃大舍公卿、共議其礼。於是司奏冀入朝不趨、劍履上殿、謁讀不名、礼儀比蕭何『後漢書』伝、十四梁冀列伝。

(14) 廖伯源「西漢皇宮宿衛警備雜考」『東吳文史學報』第五号、台北、一九八六年。後、同氏著『歷史与制度—漢代制度試釈』香港教育圖書公司、香港、一九九七年所収、二九頁。

(15) 注14書、八四頁。

(16) 甘露中、(施讎)与五經諸儒雜論同異於石渠閣『漢書』卷八十八施讎伝。

(17) 『旧唐書』卷四十三職官志・秘書省の条に、「漢代藏書之所、有延閣・

広内・石渠之藏。又御史中丞、在殿内、掌蘭台秘書圖籍。後漢桓帝延熹二年、始置秘書監、属太常寺、掌禁中圖書秘文。後併入中書。至晋惠帝、別置秘書寺、掌中外二閣圖書」とある。前漢代「延閣・広内・石渠之藏」について管掌者が記されていないのは、それが存在しなかったからだろう。後漢の桓帝延熹二年になって、はじめて禁中の圖書・文書の管掌者として秘書監を置いたとあるのだから、「延閣・広内・石渠之藏」とは、秘書監が管掌した禁中の圖書・文書にあたる。そして晋の惠帝の時に中外の圖書の管轄を一本化したのだから、「中外」が禁中・禁外を意味することは疑いない。書庫が内外に設置された理由は、圖書や文書の正本・副本を別々に保管することで、散逸の防止や内容の保証を図ることにあつたのだろう。「周礼」などには、正本・副本を別所に保管する記事がしばしば見られる。その点、警備が嚴重で、閉鎖性の高い禁中はうってつけの保管場所であつたに違いない。

(18) 劉慶柱・李毓芳著『漢長安城』(文物出版社、北京、二〇〇三年)、五六頁では異称とされ、『三輔黄图校釈』、一五九頁では承明殿の一部分とされている。

(19) 嬖幸之舍也『漢書』卷八十五谷永伝注。

(20) 晉灼曰、「黄图」有大玉堂・小玉堂殿也』(『漢書』卷八十七揚雄伝注)。ただし、現在伝わっている『三輔黄图』には存在しない。

(21) 雄之待詔、其「解嘲」曰、「登金門、上玉堂。」雄時待詔承明、故得由宦者直入金馬門以上玉堂也。

(22) 待詔については、杉本憲司「漢代の待詔について」『社会科学論集(大阪府立大学)』四・五号、一九七三年に詳しい。

(23) 『礼記』祭統に「天子親耕於南郊」とあるように、本来は南郊で行う。

(24) 陳直著『漢書新証』(第二版、天津人民出版社、天津、一九七九年、一〇五頁)。

(25) 『孟子』万章章句下、漢・趙岐の注に、「尚、上也」とあるので、「上

方」と「尚方」は通返する。

(26) 若盧、官名也。藏兵器。〔漢書〕卷十九上・少府条注引如淳。

(27) 春桑生而皇后親桑於苑中。蚕室養蚕千薄以上。〔統漢書〕禮儀志上・先蚕条注引「漢旧儀」。蚕室、行腐刑之所也。〔三輔黃圖〕卷六雜錄。

(28) 注21書、一〇七頁。

(29) 漢絲女常以七月七日穿七孔鍼於開襟樓、俱以習之。〔西京雜記〕卷上。

(30) 中黃門田客持詔記、盛綠綈方底、封御史中丞印、予〔籍〕武曰、「取牛官令舍婦人新産児、婢六人、尽置暴室獄、母問児男女、誰児也。」武迎置獄。〔漢書〕卷九十七下外戚伝。

(31) 武帝時、又多取好女至數千人、以填後宮。〔漢書〕卷七十二貢禹伝。

(32) 成帝趙皇后居昭陽殿、有女弟、俱為婕妤、貴傾後宮。……班婕妤居增成舍。哀帝時董賢女弟為昭儀、居舍号曰椒風。〔三輔黃圖〕卷三未央宮。

(33) 注21書、四三二・二五四頁。

(34) 楊寬著『中国古代都城制度史研究』(上海人民出版社、上海、二〇〇三年)、一〇六頁。

(35) 例えば、史念海主編『西安歷史地圖集』(西安地圖出版社、西安、一九九六年)、五六頁、「西漢未央宮図」など。

(36) 上令公卿朝臣与房會議温室。

(37) 在於孝文皇帝躬行節儉、……未央宮……独有前殿・曲台・漸台・宣室・温室・承明耳。

(38) 温室殿、武帝建、冬处之温暖也。

(39) 一三頁。

(40) 注5書、一四頁。

(41) 注5書、一四頁。

(42) 注5書、一八五頁。

(43) 注33書によれば史念海氏は、「発掘報告」が「少府或其所轄官署」とする第4号遺跡を椒房殿の遺跡と考えている。このほかにも、史念海氏が「発掘報告」とで施設の配置に関する見解の相違がある。

(44) 一八六頁。

(45) 楊鴻勛著『宮殿考古通論』(紫禁城出版社、北京、二〇〇二年)、二三七頁。

(46) 一八六頁。

(47) 注37書、一三七頁。

(48) 禁中に属すると考えられる施設のうち、玉堂については「三輔黄図」卷三未央宮に、「昆德・玉堂、皆在未央殿西」とあり、前殿の西にあったとされている。ところが「西京賦」には、「西有玉台、聯以昆德。……宣室玉堂……」とあり、前殿の西にあったのは玉台とされていて、玉堂とは別の建物である。「三輔黄図」の玉堂は、あるいは玉台の誤りか。

(49) 賀業鉅著『考古記宮国制度研究』(中国建筑工业出版社、北京、一九八五年)、七四〇・七四七頁。

(50) 注7論文、注44。

(51) 君(「嚴勛」)厭承明之廬、勞侍從之事、懷故土、出為郡吏。〔漢書〕卷六十四上嚴助伝。

(52) 〔漢書〕卷六十四上主父偃伝に、「主父偃、盛言朔方地、肥饒、外阻河、蒙恬、築城以逐匈奴、内省輻輳・成漕、広中国、滅胡之本也。上(「武帝」、覽其説、下公卿議、皆言不便。公孫弘曰、「秦時嘗發三十万衆築北河、終不可就、已而棄之。」朱買臣難詘弘、遂置朔方。本、偃計也」というように、武帝の側近の一人である主父偃が提唱した朔方郡の設置が公卿の議によって却下されたところ、同じく側近の朱買臣が辯護し、結局公卿たちの反対を押し切って、主父偃の策が採用されたところ。同朱買臣伝には「是時方築朔方。公孫弘諫、以為罷敵中国。上(「武帝」、使買臣難詘弘」とあり、朱買臣の弁護は武帝の命によるものであったことがわかる。ということとは、公卿の議に下して論議させてはいるものの、武帝の心中において朔方郡の設置はすでに決定事項であり、それを側近たちに代辯させたに過ぎない。このような連携を見る限り、公卿の議とは別のところて武帝と側近たちの協議があったことは明白である。

図表の引用は次のとおり。

未央宮位置図：『発掘報告』、四頁。

未央宮施設一覽：筆者作成。

乘輿缶：容庚著『秦漢金文錄』（洪氏出版社、台北、一九七四年、四二二頁。

尚浴府行燭檠：容庚著『秦漢金文錄』（洪氏出版社、台北、一九七四年、三

二九頁。

未央宮平面図：『発掘報告』、六頁。

「石渠千秋」瓦当：伊藤滋編著『秦漢瓦当文』（日本習字普及協会、一九九五年、一二七頁。

椒房殿遺跡平面図：『発掘報告』、一八九頁に筆者加筆。